

魅力発信 地域も応援

半農半X

新たな人材像

②

稲垣さんの半農半X

農

- ・米と梅、原木シイタケを生産
- ・先輩農家から技術を教わる
- ・収穫体験の受け入れも収入源に

X

- ・農村体験のイベント開催や補助金申請を有償で支援
- ・SNSでの情報発信で農村体験の利用者を県内外から呼び込み



④梅の剪定講習会に参加し、スマートフォンを構える稲垣さん
⑤野菜の収穫体験を受け入れる稲垣さん(右)

半農半Xの仕事は「お金の面で大変なことは多い」と感じるがそれ以上に「やりがい大きい」と言い切る。
同市の中山間地域に移住したのは2015年。それまで

梅の木の剪定(せんてい)講習会で枝管理を学んだ数日後、インターネット交流サイト(SNS)上で「林業体験してみませんか」と発信。富山県氷見市の稲垣信志さん(52)は、農業と農村体験受け入れの事務局の仕事に奔走する日々を送る。

交流支援

半農 × 半

農村体験受け入れ

富山県氷見市 稲垣信志さん

県外で働いていたが農村暮らしを望み、勤め先を辞めて市の地域おこし協力隊に志願。任期後も定住した。最初に取掛かったのが農村体験の受け入れの立ち上げだった。

移住後、地域特有の「稲積梅」や稲わら、竹を使った細工など古くから伝わる文化が今も息づいていることを知った。「もっと多くの人に地域の伝統を知ってほしい」という思いと、自身の仕事をつくるため、体験受け入れに関連する仕事を18年から始めた。

農家らによるイベント開催や補助金申請を有償で支援。宣伝のため自らSNSで催しなどの情報を発信する。受け入れ体制は現在、市内の7地区に広がり80人近くの農家が参加。年間延べ1000人が県内外から訪れる。

利用者が増えても、受け入れのために品目を変えたり、面積を広げたりすることは求めない。「負担なく続けられることが最優先」という姿勢は、地域の信頼を醸成。受け入れ関連の収入だけでは生活できず、貯金を切り崩すことが続いた稲垣さんが農業を始める。

め、新たな収入源を得るきっかけを生んだ。

「地域のために一生懸命動いてくれる人。安心して任せたい」と打ち明けるのは、地元の特産氷見稲積梅生産組合の副組合長、西塚信司さん(66)。組合が管理する梅園60畝を任せられた。

水田を貸すと申し出る農家もいて、現在は70坪で米を生産する。原木シイタケ1500本の栽培も始めた。

最初に始めた農村体験の受け入れが拡大する中、稲垣さんは「農業の腕も磨いて、半農半X全体を底上げしたい」と見据える。

栽培2年目の梅をはじめ、分からないことが多い稲垣さんを支えるのは地元農家だ。剪定講習会で稲垣さんが「ここを切ってもいいんですか」と尋ねると、先輩農家から「そう。上の3分の1を落とす意識で」とすぐに助言が返ってくる。

日頃から技術を助言する梅生産組合の西塚さんは「地域を背負う人になるだろう。みんなが応援したい」と目を細める。